

## 1

## エニアグラムをめぐる状況 1970～80年代にかけて ——吉福伸逸氏に聞く

日本におけるトランスパーソナル心理学<sup>(注1)</sup>の紹介者であり、翻訳家、セラピストとして知られる吉福伸逸氏は、1987年に『エニアグラム入門』(P.H.オリアリー他著)という邦題で春秋社より出版された本に、解説を書いておられます。その解説の中で、吉福氏はエニアグラムがアメリカで急速に広まった1960年代後半から1970年代にかけての、カリフォルニアを中心とした精神風土と言おうか、当時の時代的背景についても触れておられます。吉福氏の解説はわたしたちが、エニアグラムとは何かについて理解する上で、その全体を見渡すための見取り図を与えてくれるものです。

なお、吉福氏は現在ハワイにお住まいですが、たまたま帰国された折に、講演等ご多忙中のところをぬって、このインタビューに答えていただきました。

### グルジェフィアンから見たエニアグラム

**インタビューー** 吉福さんが日本におられたころは、ホロトピック・ブレスワークやゲシュタルト・セラピーを取り入れたワークショップを開催されていたんですね。わたしも当時、1987年か'88年だったと思いますが、吉福さんが主宰していらした C+F のワークで、ホロトピック・ブレスワークを体験しました。吉福さんが『エニアグラム入門』に解説を書かれたのは、そのころのことなのですね。でも、ワークショップではエニアグラムについては何もお話になっていなかったように記憶しています。

**吉福** それがももとのルールでしたからね。エニアグラムについては何も話さないというのが。今はもうぜんぜん、そういうことはないでしょうけれど。

ぼくはいちばん最初、1973年ごろのことですが、カリフォルニアのバークレーで、ジェイコブ・ニードルマン<sup>(注2)</sup>のグルジェフ研究会に入っていました。ジェイコブはグルジェフィアンですね。そのディスカッション・グループでエニアグラムのタイポロジー(タイプ論)も出てきたのだけれど、これはすごく伝統的なやり方でほとんど表には出ていません。

グルジェフのタイポロジーというのは、基本的にはたくさんの人に知らしめるものではなくて、ほんとうにある程度の修行段階を積んだ人が、自発的に理解していくものであって、そういう人にしかやらないようにということになっていました。そうでないとお互いに間違った使い方をされてしまって自己納得の道具になってしまうからです。「わたしはこのタイプだからこういう人なのよ」と、そういうふうに使われてしまうから、やめといた方がいいよというのが、グルジェフのももとの考え方なのです。

**インタビューー** 最近ではエニアグラムのタイポロジー、つまりパーソナリティ・システムとしてのエニアグラムは、オスカー・イチャーツを創始者とするというところに、大方のアメリカのエニアグラム指導者たちの見方は落ちついているようですが、吉福さんがおやりになったのは、イチャーツのタイポロジーではなく、グルジェフのタイポロジーだったわけですか？

**吉福** ぼくはイチャーツの系統ではなく、ニードルマンの系統だから、グルジェフの直系です。もちろん、イチャーツのタイポロジーも知っていたし、よく読みましたが、実際にやっていたのは、グルジェフ・ワークの中でのエニアグラムが最初です。それはももとスーフィにあったものを、グルジェフがちょっと変形させて使ったものです。だから、どうしてもエニアグラムに関しては、外に出すことじゃないし、辞めといた方がいいよということになりますね。ずっとそうだったわけです。外に言わないようにという口約束がありましたからね。

## 1 エニアグラムをめぐる状況

**インタビュアー** グルジェフのエニアグラムの中にも、タイポロジーはあったということでしょうか？

**吉福** 今みたいなものではないけれども、骨格はありました。思考・感情・本能のセンターと、本能の中にセルフプリザベーション(自己保存)、セクシャル(性的)、ソーシャル(社会的)という三つのサブタイプがあります。イチャーツから出ているものと多少言い方は違いますが、だいたい同じですね。ただ、書かれたものはありません。グルジェフの書いたもののなかには、エニアグラムに言及することはあっても、タイポロジーそのものを解き明かすことはなかったですね。グルジェフは断片的にしか語っていません。全タイプのことを語っていないのです。

グルジェフの弟子のなかに、『天界の影響』という本を書いた人がいて、彼はタイポロジーをベースにけっこう深く研究しています<sup>(註3)</sup>。

**インタビュアー** イチャーツのエニアグラムには、パッション(とらわれ)、フィクセーション(自我の固着)、バーチュウ(美德)、ホーリーアイデア(聖なる考え)というのがあります。<sup>(註4)</sup>

**吉福** そういったものは、グルジェフにはありません。

**インタビュアー** イチャーツは、タイポロジーとしてのエニアグラムは、自分が創始者だと主張しているようすが。

**吉福** いま流布しているものは全部、オスカー・イチャーツから出たものでしょうね。クラウディオ・ナランホもオスカー・イチャーツのところに行って学ぼうとしたのですが、イチャーツとけんかしてもめて、やめています。ジョン・リリーもイチャーツとぶつかっちゃった。イチャーツはチリの家族制度でこちこちに固まったところがあり、ものすごく権力的な人物で、要するにインドのグルのように、自分がグルをやろうとしていたわけです。アメリカで育った人にはそれが耐えられない。

だから、クラウディオもリリーも、エニアグラムのタイポロジーは面白いけれども、そういうなかでやられるとたまらない、付き合っていられないというわけで、タイポロジーだけを学んで帰ってきたわけです。リリーがそのときの体験を書いていますね<sup>(註5)</sup>。いま一般に流布しているのはその二番煎じ、三番煎じ、四番煎じと言っていいでしょう。

**インタビュアー** イチャーツは最近のインタビューでは、エニアグラムのスーフィ起源説を否定しているようです。

**吉福** イチャーツももとはスーフィだと言っていますよ。ぼくがいちばん最初に知っているのは、イチャーツのミッシングピリオド(失踪期)の間に、スーフィから学んだと彼が言っている。インタビューでも言っていたと思いますが。

**インタビュアー** ナランホもイチャーツがそう言ったと。でも、最近のインタビューではちょっと話が違ってきますね。シンボル図形に9つのタイプを当てはめたのは自分だとイチャーツは主張しています。

**吉福** 彼の人生の中には何年間かのブランクがあるのです。彼はその間にアフガンのスーフィのところに行って学んだと言っているのですが、でもそれは半分眉唾ですね。何をしていたかよく分からない。イチャーツはすごくいかがわしい人物ですよ。

ですから、イチャーツ自身がなんと言おうとも、エニアグラムの根底は、もともとはスーフィのもので、グルジェフが探索したスーフィの伝統のどこかから、彼(グルジェフ)が西欧社会に持ってきたものなのだという理解が最も的確だと思います。実際、ヨーロッパにはグルジェフ・ワークの一環として入ってきました。ただ、イチャーツもグルジェフが出会ったのと同じソースに出会ったと言っているわけです。いずれにせよ、イチャーツはグルジェフと同じようなものを、アメリカに持ち込んできています。

**インタビュアー** イチャーツは、エニアグラムのベースには、ピタゴラスやプラトン、新プラトン派など古代ギリシャの思想があるというようなことを言っています。

**吉福** ギリシャの方に原点があるというのはそのとおりでと思いますね。隠れたスーフィたちはギリシャ文化と触れ合ったはずで、中近東のあのあたりは古代から行き来が盛んで、ギリシャ時代から隠れたところに小グループがあったりしたようです。

それから、グルジェフのエニアグラムは音楽です。根本にあるのは音ですね。要するに音の持っている反復性、パターン性というものがベースになっている。ですから、エニアグラムのベースには音楽があるということが言えると思います。ぼくはもともとジャズなどをやっていたから、そういう接点が強くあったわけです。

**インタビュアー** イチャーツはオリアリーらカトリック・グループの著者たちが、エニアグラムの本を出版したとき、その著者たちを訴えていますね。

**吉福** 鈴木秀子さんが日本に持って来たのはそれなんです。ぼくは日本で最初に邦訳が出たその本に解説を書くよう頼まれたわけです。

**インタビュアー** 吉福さんご自身はカトリック・グループのエニアグラムについては、どのようにお考えですか？

**吉福** 解説のなかではオリアリーの本についてとくに何も否定はしていません。まあ、日本でこういう本が出て、星占いみたいになるだけで、エッセンスはなかなか伝わらないだろうなあとは思いましたが。

**インタビュアー** イチャーツは、ヘレン・パーマーが本を出したときにも、彼女を訴えています。その理由は幾つかあるようですが、どうもイチャーツは著者たちが勝手に本を出したことと、とくに自分を創始者と明記していないことに大きな不満をもっていただようですね。ヘレン・パーマーは、パーソナリティ・システムとしてのエニアグラムは、イチャーツの独創的な仕事ではなく、グルジェフから来ているというふうに言っています。

イチャーツとその後の著者たちとの著作権争いみたいなことに触れると、わたしたち日本でエニアグラムを学んでいる者にとっては、エニアグラムのルーツをさかのぼっていきこうとすると、なんでみんな分裂に分裂を起こしてるんだというところに行き当たってしまって、どうもすっきりしません。

**吉福** イチャーツの場合は最初にもうアメリカ人とのグループで大きないさかいがあり、そこですでに分裂しています。そのあとアメリカ国内に紹介され、いろいろな研究が行なわれてきているわけでしょう。よくあることですが、これはどこが元祖何々だというような世界で、単なる派閥争いですね。

そういうのに対するいちばんいい方法は、主張する人がいたら「あ、そうですか、どうぞ、どうぞ」と言ってやることです。それがいちばんいい対処法なのです。その人の中に権力欲だとか名誉欲だとかそういうものがあって、そういうことをやっているのであれば、人生のどこかの時点でそういう人はバタッと倒れますから。必ず、そうなります。ですから、そういうのを欲しい人には、あげるのがいちばんいいのです。タイポロジーを勉強したら、それぐらいわかるでしょう(笑)。

**インタビュアー** はい(苦笑)。

**吉福** グルジェフ・ワークの中はぜんぜん分裂などしていません。イチャーツから出てきたもので、どんどんおかしくなってきたんです。だから、ああなるから、外に出すのはやめようと言っていたわけです。エニアグラムは、グルジェフ的に使っていく限りは、人間理解の中でいい道具になると思いますよ。自分がどのタイプかということより、自分の持っている欠如部分を補っていくには、どの部分にアウェアネス(気づき)を持っていけばいいのかというのに役立ちます。イチャーツは問題のあるパーソナリティですよ。

**インタビュアー** 問題のあるパーソナリティから出てきたパーソナリティの理論というのは、これはいったい何なのでしょう。

**吉福** 問題のあるパーソナリティ理論なのです(笑)。彼はトランスミッター(伝達者)なのですが、純粋にトランスミット(伝達)できないから、トランスミッターの色がついてしまうわけです。

## タイポロジーは当たらない… むしろ、その人の源に目を向けよ

**インタビュアー** 話はもどりますが、ニードルマンのグループでエニアグラムをおやりになって以後、吉福さんはエニアグラムとどういうふうに関わって来られたのでしょうか？

**吉福** 少人数でグルジェフの本を読んでいた。知識はありましたから、1974年に日本に帰ってC+Fを立ち

## 1 エニアグラムをめぐる状況

上げていく上でももちろん考えました。それを組織論として考えてみると、本格的にパーソナリティ・タイプを構成するということまでではできないけれど、ポイントをおさえるだけでも、ぜんぜん違った視点が持ち込めます。

たとえば、ふつうに何かをしようと思ったら、うまくいく人たちのグループを作ろうとするでしょう。けれども、あえてうまくいかないような人たちのグループを作ろうとするわけです。そうすることによって、さまざまな摩擦を起こして、エネルギーを消費させるというやり方をする。それがグルジェフのやり方でした。彼は自分のグルジェフ・ワークをやるときに、パリのフォンテンブローで、みんなから嫌われる人をわざわざお金を払って雇ったりしています。そういうのがタイポロジーの生きている発想なのです。

ぼくも、みんなを困らせるような人を電話番号に置いたりしていましたよ。発想の原点にエニアグラムを持っていると、そういう人がいかに重要かということがわかります。これはアウェアネス(気づき)のワークですからね。人間は放っておくと、ルーティン・ワークに墮してしまうものです。

スーフィの伝統のなかに有名な言葉があります。「一杯のお茶をちゃんと入れることができれば、不可能なことはない」と。その通りだと思います。人間は一つのこと、なかなかまともにはできないじゃないですか。何がまともかという発想さえもないじゃないですか。それがティー・セレモニーになってしまうとおかしいのですが、そうではなくてほんとうに一杯のお茶を美味しく入れられれば、それがエッセンスに触れることになるのですよ。

**インタビュアー** 吉福さんは日本にいらっしゃったときに、ワークグループの中でタイポロジーについてのお話をされたことはあるのですか？

**吉福** このタイプはこういう傾向をもっているというのは説明しました。でも、あなたはどれ、わたしはどれとは教えない。いっさい言わない。でも、思っていますよ。思っているけれど、言わない。言ったってろくなことはないですから。本人が自分で見つけなければ意味がありません。そうでなければ、たんなる性格判断じゃないですか。誰かから言われた場合と、自分でああでもないこうでもないと思いながら到達した場合とでは、ぜんぜん違いますからね。でも、これが言いたくなるのですよ(笑)。

**インタビュアー** それはよく分かります。

**吉福** タイポロジーにはまった人を見ると、ああ、またはまってらあと(笑)。でもしばらくすると言わなくなりますね。数年でだいたい言わなくなる。背景に消えていく。“So what(それがどうした)”という感じですね。つまり、エニアグラムは「それでどうなの」と、どこかで、わかってやっているわけですよ。

**インタビュアー** ほんとうにそのとおりですね。タイポロジーは最初は盛り上がるけれど、そのうち、それがどうしたのと思うようになってきます。確かにそのとおりです。

**吉福** ぼくはすごくシニカルです。こちらから見て典型的なタイプに思える人でも、実際は当たっていないですね。そういう目で見ていた方がぜったいに利口なのです。典型的だと思って当てはめると、当たっていない。そういう気持で見なければいけないということです。それがグルジェフの教えなのです。タイポロジーはぜったいに当たらないというのがね(笑)。

**インタビュアー** なるほど、逆説的に…

**吉福** タイポロジーでやるときに気をつけなければいけないのは、その人の立ち居振舞い、言動、しぐさといういろいろありますが、そういったものを見ながらタイプを類推するのではなくて、そういったものが立ち上がってくることになるその人の背景の源に目をやるのが大事だということです。

なぜ、その人はこういう立ち居振舞いや、しぐさや、こういうものの言い方をしたり、こういう傾向の人生を送ったりするのか。もともとあるものの結果を見るのではなく、なぜという、その場に視野を向けることによってタイプを見なければいけません。

**インタビュアー** ワークショップをファシリテートする立場としては、具体的にはどういうところに目を向けなければならぬのでしょうか？

**吉福** 誰かが何かを、予期しない行動をしたとするでしょう。そしたら、予期しない行動に反応するのではなくて、

その予期しない行動が立ち上がってきた源に目を向けるということです。

**インタビュアー** こちらとしては反応的にならないでということですね。

**吉福** 相手の表現化された現象的な動きに直接反応するのではなくて、そういう現象が立ち上がってくるその源に、その人の心のあり方の方に目を向けるということです。そうしていかないと、人間は現象化されたものだとか、現象的に出てきた内容のものに反応してしまって、持っていかれてしまいます。ファシリテーターはそういうところに目を向けないとうまくいかないでしょうね。

なぜかという、あなたからすると予測もつかないような経験をしている人がいっぱいいるわけです。人生経験からいって、あなたなんかまだ若僧じゃないですか(笑)。

**インタビュアー** はあ(笑)。

**吉福** それが人生の70、80歳になっているいろんな人生経験をしてきた人をファシリテートしなければいけなくなった場合、出てくる現象というのはあなたの想像のつかないことがいっぱいあるわけです。そういうときには源に目を向けてください。

**インタビュアー** はい。

**吉福** タイポロジーに囚われると取り込まれます。タイポロジーというのは人間を見る目というか洞察力を持った人であれば、スピリチュアルなティーチャーであれ、セラピストであれ、知らず知らずのうちに浮かび上がって見えてくるものです。あえてエニアグラムという形を出さなくても、見えてくるものです。ただエニアグラムを学ぶことによって、それを確認できるということはあるでしょう。

ところが確認作業ではなく、それを知って使おうとすると、今度は実体とエッセンスから離れてしまった操作になってしまうわけです。エニアグラムというのは基本的にそういうものだと思います。

## ワークをやる原点の問題 動機づけ

**インタビュアー** エニアグラムのワークはグループに分かれて、タイプごとの違いで盛り上がっているようなワークには大勢人も集まっているようなのですが…。もうちょっと深く、自分の内面を見るということになると、なかなか。

**吉福** ワークをやる原点の問題ですね。そういったワークに耐えることのできない人というのは動機づけがまだ十分でないわけです。そういうところに来るところにいないのです。そういう人は来て何がわかったかという、わたしは何かしたいと思ったのだけれど、やっぱりしんどいことには耐えられないから、まだ本格的に自分自身を変えていこうという作業には取り組めないのだということがわかったということが、そのワークの意味なのです。そういうことが分かったのに、来させようとするのはもう完全な無理強いになってしまうわけです。準備のできてない人に何かをさせようとするようになってしまうから、セラピストにとってもよくないし、ファシリテーターにとってもよくないですね。

**インタビュアー** また、あのときから来ないなと思っていたら、一年後、二年後に、ひょっこり出て来られる人もいます。

**吉福** 準備ができれば来るのでしょうか。自分の内側に目を向けるというのは、そんなにたくさんの方がやる作業ではありません。たいがいの人は自分の内面に目を向けることには強い恐れを抱いています。何が出てくるかわからないから、とくに都会生活では抑圧が多いから、その恐れを克服してまで自分の内面に目を向けようという時点に行くまでには、それなりの動機づけがなければならぬものなのです。それは基本的には自発的に出てくるものですね。

ただ、その動機づけが病気があったり、社会的な破綻であったり、家庭生活の破綻であったり、他人とうまく行かないということであったり、いろんなことがあるでしょうけれど、これが自分だと思っている自分と相

## 1 エニアグラムをめぐる状況

容れない衝動が自分のなかにあつて、どうも人生のなかで居心地が悪い、自分との折り合いが悪いというようなことがあつて、その自分との折り合いの悪さがある極みに達すると一步踏み出すこととなります。

**インタビューー** わたしなどはその折り合いの悪さがある極みに達してしまった方ですが、どうも自分の人生に対して負い目のようなものがあり、なかなかそれをぬぐうことができません。自分とは違って若いころからスピリチュアルなものに目覚め、高い意識状態にいる、いわばスピリチュアル・エリートのような人がいるのではないかと。

**吉福** 若いころからスピリチュアルなことをやっている人にはろくな人はいません(笑)。きちっとした社会生活を営むことは重要なことですから、そういうことをせずに若いころからスピリチュアルなことだけに励んでいるというのは準備ができていないということです。エリートでもなんでもないので。

**インタビューー** 余談ですが、さいきん EQ(感情の知性)の次に SQ(魂の知性)というのが出てきているという話を聞きました。魂のクオリティというのですか、発達度というのか。しかし、どうやってそれを測るのでしょうか。

**吉福** そんなのは測れるわけじゃないじゃないですか。でも、お互い付き合っていれば、だんだん分かってくるものってあると思いませんか。昔から、あの人は人間のできている人だとか、やっぱりいろんな経験をして知恵を持っている人だとか、単純な庶民レベルで語られているようなことの中にヒントはいっぱい含まれていますよ。シンプルに対処していかないと。

**インタビューー** 企業研修などにエンニアグラムが応用されることについては、どう思われますか？

**吉福** そういう使われ方は有用だというのはわかります。ああいう視点を持ち込んでくると、人材登用からある特定のプロジェクトを組んだりするときに、非常に有効になってきます。持ち込むことによって人の選び方、チームの組み方がぜんぜん変わってくるわけです。これまでまったくなかった視点ですからね。

使えるとは思いますが、ただ、それで選ばれて使われていく人たち個人個人の身になってみると、ろくなことはないと思いますね。だって、エンニアグラムの根本は何かというと、一人ひとりの人間が成長するに当たってぶつかっていく問題点だとか、自分の本来持っているある傾向に対する洞察なわけです。それとして使うしかないから、つねに成長志向でなければならぬ。そういうふうに使っていかなければならぬ。ある意味で人材管理をするとか、そういうのは邪道になるわけです。

**インタビューー** ただ企業の中でも、じっさい目の前にいる人とどういうふうにつき合わなければならないかというところで、エンニアグラムが役に立つこともあるようです。

**吉福** そういう意味で有効性はあるでしょう。たくさんの人が自己評価をするときに、自己過大評価とか自己過小評価とかしてしまうから、そういうときにああいう道具があると、過大過小評価をある程度修正するのに役立つということは十分に考えられます。

## それでも、エンニアグラムの伝統は消えない

**インタビューー** イチャーソのタイポロジーは、クラウディオ・ナランホが発展させたものであり、その意味ではナランホの貢献は大きいと思うのですが。吉福さんはナランホに関しては、どのような印象をお持ちですか？

**吉福** すごく聡明な人だと思いますね。こんなに頭のいい人がいるのだろうかと思ったほどです。イチャーソのところに行った人の中ではジョン・リリーなんかよりも優れていて、吸収力が早く、もっとも正当なものを持っているのではないかと思います。心理学をベースにしているし、臨床もやっているし、ほんとうにエンニアグラムをやりたいと思うのであれば、クラウディオをやっていけばいいかもしれませんね。

**インタビューー** わたしたちはリソ&ハドソンからエンニアグラムを学んできたわけですが、ナランホにもどってみると、リソたちのエンニアグラムがどこから来たのかということも見えやすくなります。

**吉福** 見えてくるでしょう。アメリカの人たちのエンニアグラムは、ほぼすべてがクラウディオのところから出ていると

思いますよ。

**インタビュアー** ナランホを通して一般に広まっていったエニアグラムも、自己成長の道具として用いれば、これは眼からうるこというところもあるわけですね。だけれども、その一方でそのノウハウを使って、カリスマになる人とか、変な人が出てくることもあるようです。

**吉福** オスカー・イチャースがまずその最初じゃないですか。ぼくはそのへんは今となるとオールド・スクールだから、正統派でね、保守派なのですよ(笑)。そうなるのは目に見えていた。道具として使えるのはよく分かる、たくさんの方の助けになるかもしれない。でも、そういうのは間違っただけの手渡すと変なふうになるので、そうならないよう、止めるのが重要なことだと。

**インタビュアー** でも、いろんな人の手に、すでに渡ってしまいました。

**吉福** いまみたいに広がって行ってしまっただけでは止めることはできないでしょう。でも、ぼくは思うのだけど、エニアグラムの伝統は消えないですよ。どんなになっても消えないから、大丈夫です。

**インタビュアー** 大丈夫です、と言っていたいたところで、まだまだ伺いたいことはたくさんあるのですが、時間がなくなりました。今日はお忙しい中、ほんとうにありがとうございました。

(2001年9月1日)

インタビュアー: 中嶋真澄

取材協力・注釈: ティム・マククリーン、高岡よし子

(注1) 1960年代末に成立した心理学で、西洋心理学、東洋思想、シャーマニズムなどを総合的に研究し、心の全体像や意識の進化についての理論を導いている。また、健全な自我の確立を経た上で、自我を超えた意識の成長に向かうための方法論を研究している。エニアグラムもその研究対象となっている。

(注2) ジェイコブ・ニードルマン: サンフランシスコ州立大学の哲学教授。東西の哲学や心理学、神秘思想、精神療法などを深く探求するグルジェフィアンとして、多様な著作を発表してきた。『宇宙感覚』(平河出版社)、『ロスト・クリスチャニティ』(めるくまー)など。

(注3) ロドニー・コリンのこと。1930-40年代にウスペンスキーと親しく、彼から学んだ考え方について研究し、実践した。『天界の影響(“The Theory of Celestial Influence: Man, the Universe, and Cosmic Mystery”)』は、1952年に発表された代表作。

(注4) タイプ毎に、独特の Passion (とらわれ)、Fixation (自我の固着)、Virtue (美德)、Holy Idea (聖なる考え) をもつとされている。ドン・リチャード・リソ & ラス・ハドソン 著、**“Understanding the Enneagram”** (改訂版) は、これらの概念を以下のように説明している。  
 《「美德」とは、本質(エッセンス)を生きる人が自然に表す資質である。本質がもつ、拡がりのある、二元論を超えた資質を表現している。しかし自我がこうした「美德」とのつながりを失うと、性格構造が「とらわれ」を発達させ、その喪失を埋め合わせようとする。「とらわれ」とは、本質とのつながりを喪失したことに対する、隠れた感情的反応である。「聖なる考え」は、人が「今ここで、目覚め、リアリティをそのままに見ているとき、明晰で静かな頭の中に自然に生起してくるもの。「聖なる考え」を喪失すると、自己やリアリティについて、特定の自我の幻想に至る。それが「自我の固着」である。》

(注5) “John Lilly, So far...” Francis Jeffrey and John C. Lilly 1990

## 2

### クラウドィオ・ナランホをめぐって

#### 理辺良保行(リベラ・ほあん)教授に聞く

はじめに、『エニアグラム研究』の読者のために、リベラ先生のご紹介をさせていただきます。リベラ先生はスペインのご出身(現在は日本に帰化しておられます)で、上智大学人間科学部の教授であり、カトリックのイエズス会の司祭でもあられます。エニアグラムアソシエイツの木ノ内・後藤・中嶋と同期(1997~98年)に、日本エニアグラム学会の理事をお務めになり、『英語でエニアグラムを学ぶ』特別講座や上級者のためのワークショップでもご指導いただきました。

また、リベラ先生は1994年にクラウドィオ・ナランホを日本に招聘するためにご尽力された方でもあります。そこで、今回はリベラ先生に当時のことを含め、ナランホをめぐってのエニアグラムについてお話を伺うことにしました。

#### (1) クラウドィオ・ナランホ来日の経緯について： ナランホのワークショップ

**インタビューー：**1994年当時、どのようないきさつからナランホを日本にお招きすることになったのでしょうか。そのあたりのお話からお聞かせください。

**理辺良先生：**ナランホを日本に招聘したのは、わたしとブリギッタさんという人です。ナランホとの連絡はわたしがスペイン語でやっていました。1993年の夏にわたしがスペインでナランホと会い、翌年の夏に来日ということになったわけです。ブリギッタさんはドイツ人のセラピストですが、日本人と結婚され日本に住んでおられる方です。彼女とエニアグラムの話をしている面白いなということになり、彼女はナランホと非常にいい関係を持っていましたから、日本に呼ぼうかということになったわけです。

**インタビューー：**リベラ先生は以前から、ナランホと面識がございましたか？

**理辺良先生：**1993年以前、ナランホの面識はありませんでした。わたしの場合はイエズス会ですから、最初ナランホとの交渉はちょっと難しかったですね。ナランホはイエズス会嫌いなので(笑)。もっとも、わたしもナランホとの関係は悪くなかったです。

ブリギッタさんは日本での会場の設定とかワークショップ参加者との連絡などもすべておやりになりました。そのときのワークショップ参加者は53名で、うち日本人は34名、あとは外国人でした。

**インタビューー：**そのときのワークはどういった内容のものだったのですか？

**理辺良先生：**初心者向けでしたね。ワークはナランホなりのやり方があります。これは面白いですよ。ワークの参加者には事前に参加者の写真付きの自己紹介カードを作らせ、初日に提出してもらいます。イチヤーンもそうですが、写真を見てこの人はどのタイプかということをおぼろげに捉えておく。次に性格の特徴を表わすような形容詞300をリストアップしたものから、自分に当てはまるものを選んでくださいというやり方で、参加者に選ばせたものを分析する。これは統計学を用いた因子分析からタイプを見ているわけです。これだけのことを、すでにワークが始まる前までに準備しているのです。

ナランホはワークをやっているときにはわりあい慎重でした。彼はどちらかというと文学的なアプローチをとったのですが、そのときも本を使って英語でそれを読み、通訳が日本語に訳すというようなことがありました。すると外国人は日本語の通訳が入っている時間が無駄だといって、日本でのナランホのワークに不満を持った人もいましたね。彼らはとにかく早く学びたい。だから、焦りがでてきてイライラする。日本人は表立っては何もないませんが、今度やるときは日本人だけでやろうというような話になり、そういう難しさもありましたが、まあ最後はいい雰囲気になりました。



そして、この次にはそれをもっと深めるワークをという企画があがり、ナランホは翌々年に再来日する予定になっていたのですが、ナランホ自身の個人的な事情で残念ながら実現しませんでした。

**インタビュアー:** それはほんとうに残念でしたね。もし、再来日しておられたら、私もワークに参加することができたのですが。私が邦訳が出ていたリソの本でエニアグラムを知ったのは、たしか 1995 年のことだったと思います。

**理辺良先生:** 実際のワークでは、パネルディスカッションをたくさんやりました。パネルは自分のタイプの番号で集まり、テーマを決めて話し合いをしたあと、グループごとに前に出て、自分たちのことを話すといったやり方です。それを見ていると、なかにはそのグループに合っていない人が出てきます。例えば、典型的なタイプ5の物静かな人たちの中に、すごく強いエネルギーを持った人が混じっていたりするわけです。そうすると、その人はタイプ5ではないのではないかと、話し合いの中でそれを指摘していくのです。

## (2) ナランホからイチャーズに遡って： エニアグラムとスピリチュアリティ

**インタビュアー:** ナランホから今度イチャーズに遡ろうとすると、どうしてもエニアグラムのルーツということが気になってきます。エニアグラムのシンボル図形はグルジェフが西欧の人々に初めて紹介したものだと言うことになっていますが、パーソナリティ・システムとしてのエニアグラムのルーツについては、ごく最近までユダヤ教の神秘教団スーフィ派に門外不出の口伝として伝わってきたものだという説が広まっていた。しかし、現在では、エニアグラム図に9つの性格を当てはめたのはイチャーズが最初であり、イチャーズが創始者であるというところに落ち着いていますね。イチャーズ自身も、自分が創始者であると主張しているわけでしょう。それでは、いったいスーフィ起源説というのはどこから出てきたものだったのでしょうか？

**理辺良先生:** ナランホはイチャーズから聞いたと言っていますね。イチャーズがそう言ったんだと。しかし、チャーズ自身は否定しています。イチャーズの場合には不思議なパーソナリティですからね。彼はとにかくパーソナリティシステムとしてのエニアグラムは自分が創始者であると主張しているわけです。カバラとの関連はあると言うのだけれども、スーフィとの関係は否定しています。

**インタビュアー:** イチャーズとナランホの関係はどうだったのでしょうか。

**理辺良先生:** イチャーズとナランホは離れてから、一度も会ったことがないようです。ナランホによれば、チリのアрикаで訓練していたときに、イチャーズから「とにかくあなたは一ヶ月ぐらい砂漠で勉強しなければなりませんよ」といわれて、そこで砂漠に行ったのだけれど、ところがもどつてくるとイチャーズは「この人は勝手に動いたりして自己中心的だからだめです」と追い出された。もっとも、ナランホによれば、それはおそらく訓練の一つの試しだったのだらうということです。

**インタビュアー:** ナランホはイチャーズの自分に対する扱いは、ワークの一つであったかもしれないと言っているわけですね。

**理辺良先生:** ナランホは最初、イチャーズのもとで勉強しました。そのところではまだ公の出版物は刊行されていません。初めてエニアグラムを印刷物にしたのはジョン・C・リリー<sup>(注1)</sup>という人です。彼はナランホと一緒にイチャーズがチリでやっていたワークショップに行ったらしいですね。ナランホはそのあとアメリカに戻り、自分でエニアグラムを教え始めました。

ナランホのワークショップにはロバート・オチェスというイエズス会士とヘレン・パーマー<sup>(注2)</sup>が参加していたということです。オチェスはロヨラ大学でイエズス会士にエニアグラムを教え始めました。そこにパトリック・オリアリーという人がいました。オリアリーはマリア・ビーシングとロバート・ノゴチェクという人と三人で組んで“The Enneagram: A Journey of Self Discovery”<sup>(注3)</sup>という本を書いています。

**インタビュアー:** リソはもともとイエズス会の流れでエニアグラムと出会っているようですね。ところで、イチャーズはオリアリーらがこの本を出版したことについて、かなり許しがたいところがあるようですが。

## 2 クラウディオ・ナランホをめぐって

**理辺良先生：** イチャーツはオリアリーやパーマーがエニアグラムについての本を出版したときには、著作権問題などで裁判に訴えています。ナランホに関しては何も言っていません。分かってないというようなことは言うのだけれども、公に反対したことは一度もありませんね。ふたりは年齢的にはほぼ同じぐらいでしょう。ナランホは日本に来たときは64歳ぐらいだったから、いま70歳ぐらいだと思います。

**インタビュアー：** 裁判というのもよく分かりませんが、いったい何がいちばん問題だったのでしょうか。

**理辺良先生：** エニアグラムはもともと霊性(スピリチュアリティ)のひとつなのです。それはあくまで自分との戦いのためにあるものであって、だから公開してはいけないということだったのです。しかし、いつの間にかパブリックになって、いろんなふうに使われている。1993年のLAウイークリーでのインタビュー<sup>(注5)</sup>では、そのことについてどう思いますかという質問に、それは別にかまわない、応用編だから勝手に使ってもらってかまわないと答えています。ただし、それを作ったのが自分だということだけははっきりしておきたいと主張しています。イチャーツはナランホ以後のエニアグラム著者は、結局みんな分かってはいないんだということを言いつづけています。そして、イチャーツもナランホも、とくにイエズス会が霊的指導のためにエニアグラムを使っているということに関して非常に否定的です。

**インタビュアー：** ポピュラーな流れはまあいいでしょう、応用編だからと。ところが、イエズス会の霊的な修行に使うことには否定的であると。それはどういうことですか。

**理辺良先生：** 罪の概念が出てくるからです。フィクセーション(自我固着)とかパッション(情動)とか、それらを意識化することによって生かしていくことができるのだけれども、そこに罪の概念を入れると全部狂ってしまうというわけです<sup>(注6)</sup>。エニアグラムは宗教とは関係がないということですね。

**インタビュアー：** イエズス会で霊的な修行に使うときには、罪の傾向を強調するわけですか？

**理辺良先生：** イエズス会の特徴と言われているのが黙想指導、つまり瞑想ですね。霊操<sup>(注7)</sup>のときにそれを使うのです。あなたはこれこれの罪の傾向があるからと。そうすると、結局、宗教的な枠組みにおいて説明することになり、イチャーツもナランホもそのことに対して否定的なわけです。ナランホも宗教という言葉を使いません。スピリチュアリティという言葉を使っています。スピリチュアリティというのはあらゆる宗派を超えるもの、あるいは基本にあるものです。たとえば、スーフィでもユダヤ教のカバラでも、キリスト教でも、もちろん共通点があるのだけれど、それを特定の宗教の宗派のために使うと歪めてしまうことになるのです。

**インタビュアー：** スピリチュアルというのは宗教宗派を超えているということですね。

**理辺良先生：** 具体的にどの宗教ということではないのです。あらゆる宗教の根底に流れているものであって、そこから宗教が生まれるようなものですね。仏陀にしろキリストにしろ、それぞれに深いものがあります。仏教もキリスト教も本物だと思うのですよ。しかし、次が難しい。宗教は制度になってきますからね。宗教宗派になると、根底からずれちゃって、それを守ろうとする方向に行ってしまうことが多いのです。

### (3) イチャーツのエニアグラム： エニアグラム本来の目的について

**インタビュアー：** イチャーツは原分析(プロトアナリシス)という言葉を使っています。

**理辺良先生：** プロトアナリシスとは、人間のパーソナリティないしは自我についての体験的かつ理論的な理解であるということですね。理論的にもそうですし、実感として自分に気づくということ。その両方がなければなりません。

われわれが日本でもやっていること、これは全部プロトアナリシスですね。性格の分析ということです。それは第一段階で、自分の傾向に気づくということですね。では、気づいたらどうすればいいのかというと、その次の段階に入ります。そして、第二段階はパッションとの戦いになります。そこでは徳というものも出てきます。そして、第三段階は瞑想に入ります。しかし、一般に流布しているエニアグラムでは、第二段階、

第三段階のアプローチが、アメリカでも日本でも抜けているわけです。第一段階での気づきがあっても第二段階、第三段階のアプローチがなければ、あとはどうすればいいのかわかりませんね。

**インタビュアー:** では、第二段階以降は私たちには可能なのでしょうか。

**理辺良先生:** わからないですね。わからないというのは、ナランホのもとで徹底的にやるとか、リソのもとで徹底的にやるとか、誰か指導者のもとで徹底的にやらなければならないでしょう。フィクセーションというものは、頭でわかったつもりでいても、そこからほんとうに自由になっていなければ、なおさら大変なことになってしまいます。たとえば、エニアグラムを取り扱っている人たちが、イチャーツの訴訟問題などを含めてそうですが、なぜ分裂していくのかという疑問があるでしょう。日本でも分裂がおきていますね。なぜそういうことになるのか…。

**インタビュアー:** はい、残念なことにそれが現状です。また、一部にはタイプ判定に関して強固なこだわりを持つ人もいます。ファシリテーターがどういうレベルにいるのかということが問われますね。昨年暮れにリソたちに行なったインタビュー<sup>(注8)</sup>でも、そういうことが少し話題になりました。

**理辺良先生:** なぜだろう。たぶん早すぎるのです。十分に消化していないということでしょうね。たとえば、わたしはタイプ8、あなたはタイプ7と言ったりしているだけでは始まらないですね。タイプ8なら8で、タイプ7なら7で、そして1なら1で、どのタイプにしる、そのタイプがかかえているフィクセーションは大変やっかいなものです。ところが、そのフィクセーションをかかえたまま、自分をよく分かっていないままに、やっているのではないかと思います。

自分を分かっていない人がファシリテーターになっても、一応エニアグラムの理論を学んでいけば、理論は指導できるでしょう。でも、それ以上はできないのです。なかにはエニアグラムを権威にする人が出てきたりして、誰が本物を持っているかといった権威の競争のようになってくることがあります。そうすると、真の知恵は伝わりませんね。

**インタビュアー:** 本家本元争いみたいな…(笑)。エニアグラムは自己観察というか、自分を見つめることが必要になりますね。そのためには、まず最初に学ぶ側が、前提としてある程度、内面的に強くないとだめなんじゃないかと最近思っています。内面を見ることに耐え得る強さというか、そういうものがないとやっけないのではないかと。

**理辺良先生:** 心理学には三つの流れがありますね。一つは行動心理学、もう一つは精神分析、そしてもう一つはヒューマニステック(人間学的)な心理学。ロジャースなんかそうですが。そして、その後にはトランスパーソナル心理学が出てきます。トランスパーソナルというのは自我を超える次元ですね。その意味ではエニアグラムはトランスパーソナル心理学の領域にはいつてくるわけです。

ですから、前提としては自我がなければ始まらないですね。まず自我の形成ということがあって、今度はその自我といかにして戦うかということですから。それは自我を壊すということではなく、自我に囚われないように進んでいく、自我を超えていくということです。アメリカ人の場合は強い自我を持っていますから、自我構造の枠を超えていくということには非常に抵抗があるわけですが、日本人の場合には欧米人ほどには自我が強くないですから、自分のタイプがわかりにくいということはあるかもしれませんね。そのへんの違いはあるにせよ、自我がないと怖いですよ。変な誤解をして悟っちゃると、自分が崩れてしまうとか、吸い込まれてしまいますから。

臨床心理学の場合には、たとえば境界例などとすと、それこそ自我が形成されていなければ、ほとんどひとりでやっていけない。だから、子供を教えているような感じになってしまうわけです。自我ができていなければ、その成長のレベルから出発しなければなりません。リソは9つの意識のレベル<sup>(注9)</sup>についての概念を作りましたね。その意味でレベルの概念は指標になると思いますね。もし、レベル5以下だったら、エニアグラムはあまり使えないと考えた方がいいでしょう。

**インタビュアー:** でも、そういう人がワークに参加されることもありうるわけで、そういう場合、今度はファシリテーターの対応が問題になってきます。カリスマ的なファシリテーターが、精神的に弱い人を取り込んで、カル

## 2 クラウドイオ・ナランホをめぐる

トみたいになっていくことも考えられなくはありませんからね。

**理辺良先生：** 危ない人が出てくる…。ですから、ファシリテーターに関しては、この人はエニアグラムを知ることによって、相手を殺さない人になってくかどうか、この人を世に出すことによって、世の中がよくなるか悪くなるかということが問われますね。その意味では免許ということが大事かもしれません。では、その基準はということになると、日本ではどの団体が、どういう資格でやるのか、これはなかなか難しいことです。いずれにせよ、最低限、経験のある指導者のもとでやることは必要でしょうね。

### (4) あるがままを見るために 瞑想の勧め

**インタビュアー：** ナランホの話にもどりますが、ナランホは『性格と神経症』<sup>(注10)</sup>の初めの方に、グルジェフとイチャーツの思想をまとめて図式化していますね。彼はセンターの概念については、イチャーツから来たものを継いでいるわけですか。

**理辺良先生：** そう、それを臨床心理学の概念に置き換えたという感じですね。

**インタビュアー：** 『性格と神経症』に載っている図式を見ると、性格の側にはグルジェフのいわゆる低次感情、低次思考、本能がおかれ、それと対峙するものとして、本質の側に高次感情、高次思考、純粹本能があると説明されています。そこで、性格(パーソナリティ)と本質(エッセンス)ということが出てくるわけですが、リソたちも数年前の国際ワークあたりからは、9つのパーソナリティのみならず、エッセンスについてもわりあい突っ込んだ話をしていました。

**理辺良先生：** トランスパーソナルの分野ではこれはもう誰でも認めていることですね。知覚のシステムとして、思考があって感情があって行動がある。そして、それには低いレベルと高いレベルがある。たしかにそのとおりですね。結局、自我の選択として目に見えるものと見えないものがあり、自我は見えないものを切り捨てていく。では、それを直すためにはどうすればいいかという、わたしは瞑想をお勧めします。瞑想をやることによって、物事をあるがままにとらえることができます。

**インタビュアー：** 普通の生活をしながら、瞑想するにはどうすればよいでしょうか。ひとりでやろうとすると、私などはたいてい寝てしまいます(笑)。

**理辺良先生：** 座禅をやったらいいですね。インターネットを使って検索すれば、どこか近くに座禅をやっているお寺が見つかりますよ。ここ(上智大)でも、週一回一般の人を対象に、カトリックの神父がやっている座禅会があるのですよ。そうすると、指導者がいますからね。もちろん、指導者がいる方が望ましいです。わたしは、いちばん最初、何も知らないまま自分でやってみて、いい経験だったので、どこに行っても座布団を持って行って自分でやっています。ある程度、姿勢と呼吸を覚えていれば、ひとりでできるようになります。

**インタビュアー：** 瞑想をやることによって、パーソナリティからエッセンスの方へ行けるのですか？

**理辺良先生：** 行くんですね、行きますよ。ただし、誰が、何人ぐらい行けるかはわかりません。

**インタビュアー：** 愚かな質問で申し訳ないですが、瞑想をして、いきなり目を開けるとエッセンスになっているということがあるのでしょうか？

**理辺良先生：** あります。ありますが、長続きはしないですよ。いちばん最初は何も知らないからできたのでしょいうけれど、今度また同じものを求めてもだめですね。でも、座っていればそのうち見えます。見えるけれども消えちゃう。消えてしまって、場合によっては逆効果になるかもしれません。そういうときには指導者がいるといいでしょうね。

**インタビュアー：** エニアグラムは自分のタイプを探すところから始まります。それは自分のことがまだわかっていない段階ですね。自分のことがわかっていないで、いきなりスピリチュアルな世界に入っていくのは危ないということはありませんか。

**理辺良先生：** 危ないですね。エネルギーがあふれてきますから。まだまだ自分を分かっていない人が、エネルギーだけがあふれた状態になり、すごいパワーで自分の囚われを他人に押しつけてしまうということにもなりかねません。ましてや、そういう人がファシリテーターのような立場になると危険です。

指導者がいれば、最初のナランホとイチャーツの関係でも触れたように、指導者と対決することがあります。指導者が相手をけなすことによって、相手がそれに耐えうるかどうか試すようなこともありますね。それは指導者もわかっていてやるなら問題はないのですが、自分のことがまだまだ分かっていない人が、仮に指導者的な立場に立ち、自分の自我の押し付けで無鉄砲にやっちゃくと、相手はつぶれます。

## (5) グループワークの意義 お互いの成長のために

**インタビュアー：** わたしたちはエニアグラムアソシエイツという名前で、個人が集まったの勉強会やワークショップを行なっています。自分自身を振り返ると、ファシリテーターなんかやっているといいのだろうかと思うこともありますが、でも少人数の集まりにせよ、グループがないとなかなか学び続けられません。

**理辺良先生：** お互いに教えながら、同じ目的で集まるグループということですね。エニアグラムはイチャーツから始まってはいるけれども、グループがなければできません。その中では、試すようなことがあっても、グループに波があったとしても、われわれの目的ははっきりしています。それはお互いの成長ということです。

**インタビュアー：** 私のような未熟なファシリテーターにはなかなか大変です。

**理辺良先生：** ワークショップにやってくる人は、自分を知りたいからやってくるわけです。そこで、わたしだったら「ちょっと辛い経験があっても大丈夫ですか」と聞きます。そうでない限りは約束できないですからね。エニアグラムとはこういうものなのですよという説明までは OK だけれど、実際にワークを進めて行くと、やはりその人のひずみとかが出てくるでしょう。そういうものにぶつからざるを得ない。場合によっては対決せざるを得ないときもあります。そうすると本当に先生に対する信頼なのです。この人だったら、ともかく分かってやってくれているのだからと、そういう信頼関係が必要でしょうね。

**インタビュアー：** こちらの力量不足もあるのでしょうかけれど、しんどいワークにはなかなか次回から人が来てくれない…。だからといって、積極的に人集めをするというのも、それは違うという気がしています。

**理辺良先生：** エニアグラムはそんなに大勢の人のために使えるようなものではありません。ビジネスとか応用面では、それは別に自分の成長のためにやるのではないわけだから、うまくやっていけるでしょう。また、エニアグラムを教えることで収入を得ようというようなことになると、お金が目的になってきますからね。気持ちいいところだけをやって、何回も何回も参加してもらおうようにするでしょう。しかし、個人の成長というところで、誠実に呼びかけて5、6人が集まったとして、そのなかで一人ぐらい残ればよいところじゃないですか。いや 100 人のなかに一人ぐらいいれればよいかもしれませんよ。

エニアグラムというのは、本来スピリチュアルな成長のために使われる道具ですよということですね。それを忘れちゃうと、別に悪い意味ではありませんが、世俗的な方向に行ってしまうと、スピリチュアルなものとはかけ離れてくることになります。

**インタビュアー：** エニアグラムを教えている人にもそれぞれタイプがあるわけですね。ナランホ自身はたしかタイプ5だと聞いたことがあったように記憶していますが。

**理辺良先生：** タイプ4か5ですね。若いときの彼の写真を見ると、ほんとうにロマンチック。いまはだいぶ太っちゃったようですが、タイプ5でウイングが4かもしれません。

**インタビュアー：** 個々のファシリテーターがエニアグラムをどう伝えていくかということで、自分の持っているタイプの傾向があると思います。マニュアルを重視するところもあるようですが、わたしはどうもマニュアルどおりにやるというのは苦手ですね。それでは自分の個性が抑圧されるというか、そんなふうに感じ悩んだ

## 2 クラウディオ・ナランホをめぐって

ことがありました。最近では、ファシリテーターにもその人のタイプがあり、そのタイプの持ち味というものは、生かしていいのではないかと思っているのですが。

**理辺良先生：** 中味としていいマニュアルがあっても、それをどう生かすかは自分のタイプなのですね。それがなくなっちゃったら面白くない。たとえば、タイプ6のファシリテーターがやればマニュアルに忠実にやろうとするかもしれませんが、そうでないタイプもいるわけです。自分の持ち味を出していいと思いますよ。

それはカウンセリングでも同じことです。たとえば、カール・ロジャースから学んだ人が、ロジャースを真似しようとしてやってみるのだけれども苦しい。できないのですよ。ロジャースではないわけですからね。そこで彼の言っていることは十分に理解した上で、それぞれに自分たちのやり方を生かしていくということになります。

また、日本の仏教には道元がいるし、一休さんのような人もいますね。みな違うわけです。そういった人物の教えや思想をたどることによって、みなが同じになるのではなく、それこそ磨かれたそのタイプが出てくる。だから、それぞれの人は自分に合うような先生を求めるわけです。

**インタビュアー：** 何年前かに、エニアグラム関連のワークでリベラ先生から直接ご指導いただく機会がありましたが、今回先生のお話をうかがいながら、そのときの体験について幾つか思い出したことがあり、自分のなかでもやもやしていたものがクリアになってきたところがありました。気づきを得るには長い時間をかけ、少しずつ少しずつ、それこそ薄皮をはぐような感じでやっていくというか、そういうものなのかもしれないなあと感じました。きょうはお忙しいなか、大変貴重なお話をありがとうございました。

インタビュアー：中嶋真澄（2001年6月20日）

(注1) ジョン・C・リリー：John C. Lilly イルカの研究で知られる。“THE CENTER OF THE CYCLON –An Autobiography of Inner Space”（1972年）において、チリのオスカー・イチャースのもとでの体験について語っている。

(注2) ヘレン・パーマー：Helen Palmer ナランホよりエニアグラムを学ぶ。インタビュー・テクニックを用いた統計的な方法を用いている。

(注3) “The Enneagram: A Journey of Self Discovery”（1984）：『エニアグラム入門』というタイトルで邦訳が春秋社より出ている。日本語版初版 1987年

(注4) ヘレン・パーマーはパーソナリティ・システムとしてのエニアグラムはイチャースを創始者とするものではなく、イチャースはグルジェフのアイデアを持ってきたのだと主張している。（→注5）

(注5) LA Weekly 1993 Nov: Michael J. Goldberg によるインタビュー

(注6) パッションはキリスト教のいわゆる7つの大罪と呼ばれるものと合致する。もともと、キリスト教で大罪の数が7つとされたのは 13世紀以降のことで、それ以前は8つあるとも言われていた。たとえば、4世紀の砂漠の隠修士エウアグリオス・ボンティコスは、隠修士が修行中に遭遇する、8つの悪しき想念をあげている。4～5世紀の教父アウグスティヌスもこれらの罪の問題に言及している。

(注7) 霊操：カトリックの修道会イエズス会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラが創始した黙想などを含む霊的修行法。

(注8) 『エニアグラム研究』2号参照

(注9) 9つの意識のレベル：リソ&ハードソンは意識の発達のレベルとして、それぞれのタイプの健全、通常、不健全の状態をさらに三段階に分類し、各タイプの内的構造を理解するための枠組みを作り上げた。

(注10) “Character and Neurosis: An Integrative View” Claudio Naranjo（1994）  
邦訳『性格と神経症』（春秋社）1997年

3

意識のレベルについて

——ティム・マクリーン氏に聞く

〈紹介〉

ティム・マクリーン氏(C+F ワークショップ代表)はリソ&ハドソンが主宰するエニアグラム研究所の日本の窓口として、エニアグラム研究所・東京を高岡よし子氏と主宰しています。1996年から2000年まで、日本エニアグラム学会によるリソ&ハドソン招聘事業において、通訳およびコーディネーションを務めました。

〈1〉アメリカで起った同時多発テロについて

—— 今日はお忙しいところ機会をつくっていただきありがとうございます。以前からティムさんと話し合っていたと思っていましたので、このような機会が実現できて、とても嬉しく思っています。今日は的を絞って「意識のレベル」という問題についてお話をいただければと思っています。

ところで、9月11日にアメリカで信じられないようなテロ事件が起ったのですが(対談は9月18日)、まずそれについてお話を聞かせていただけませんか。リソさんたちがどう捉えていられるかについてもとても関心があります。

私たちエニアグラムを学ぶ者にとって、今回のテロ事件をどのように受け止めたらいいいのか。事件を目の当たりにして、世界の危機に対してエニアグラムに何ができるのか、ということがまず浮かびました。個人的なことではないので関係ない、なにもできない、と言ってしまうのは簡単だけれど、私たち自身の内なる問題としてとらえたときに、一体何ができるのでしょうか。

ティム: テロ事件が起ったとき、私は東京にいました。研修のために伊豆から出て来て、ちょうどホテルにチェックインしてテレビをつけたら、二機目が当たった瞬間だったんです。非常にショックを受けました。世界が揺れる、まさにエニアグラムのいうとショック・ポイントですね。ショック・ポイントとは意識の変容をもたらす、大きな刺激のことですが、その刺激は一瞬の内に、何が大切で本質的かを思い出させるものでもある、ということを書いてリソさんたちにメールを送りました。たぶん世界中の人たちから連絡が来たと思いますが、彼らから長いメールをいただきました。

そこには、「探求する心(オープンな心の姿勢)」を持ち続けること、そして、「いまここ」に自分がグラウンディング(地に足が着いている)している感覚から物事を見ることが重要である、ということが書かれていました。

それは、我々が衝動的にテロリストに反撃してはならないことを意味します。怒りの反応は自然なものです。衝動的に怒りをぶつけるのは、もっと深い悲しみを生み出すのです。アメリカはいま、テロを受けた祖国のために戦おうという意識が強いけれど、エニアグラムはもっと本質的なつながりを思い出しながら関わるべきだと教えてくれます。

ニューヨーク市の市長、ジュリアーニ氏は前から知っていてすばらしい人だと思っていましたが、今回の事件に関してニュースでこんなことを言っていました。それはチャーチルについてなのですが、第2次大戦でロンドンが空襲を受けたときに、「人間の最も重要な、大切な心の資質は勇気である」と話したということです。

まさに今回もその通りだと思います。テロリストもそうですが、攻撃的な人たちは、多くの心の痛みと不安を抱えています。強い被害者意識は、非常に防衛的で妄想的な心の世界を生み出します。そして被害者意識が強まるほど、自己正当化し、加害者的な反応が強くなってきます。私たち自身もいま、恐れをどうやってのり越えるか、そして本当の勇気とは何かが大きく問われているのだと思

### 3 意識のレベルについて

います。強さとは攻撃からくるのではなく、自己防衛を超えた理解や許しというものの中にあるのだと思います。自分の苦しみから自動的・衝動的に行動するのではなく、何が本当に大切なのかに目覚め、世界はつながっているということ思い出していかないと、こういった事件は繰り返されるでしょうね。

—— どうしてもマスメディアは大きな声しか拾わないので、今は危機感をあおる形で捉えられがちですけれど、アメリカはもう少し冷静になってほしいと思いますね。

ティム： 一方で、アメリカにはいい意味での正義というものも存在すると思います。問題を起こした人々には厳正に対処すべきですが、テロリストと戦争をするということではなく、パレスチナとイスラエルの問題に勇気をもって取り組み、自己防衛を乗り越えて互いに譲り合い、本当に安定した世界のつながりを求めていくことにもっと力をいれるべきでしょう。

#### 〈2〉 リソ&ハドソンが理論化した「意識のレベル」

—— それでは本題に入りたいと思います。「意識のレベル(発達)の諸段階」はリソ&ハドソンが提案をして理論化したものですが、これについてお聞きしていきたいと思います。エニアグラムは分裂と統合とか、いわゆる意識の健全、不健全の問題について早くから扱っていますが、リソ&ハドソンはこの「意識のレベル」によってそれをかなり明快に理論化していますね。これは初めてのことで、リソ&ハドソンのオリジナルと考えていいわけでしょうか。

ティム： いいと思います。リソ&ハドソンはタイプ毎に、ダイナミックな心の構造、つまり、もっとも健全でそのタイプの本質的資質を表している状態から、もっとも不健全な状態に至るまでの 9 つのレベルを扱っています。こうした意識の層をはっきりと打ち出したのは、リソさんたちが初めてだと思います。

—— 私たちの自我構造がどういう仕組みで本質へたどりつくのか、9 つのタイプごとにこんなにわかりやすく説明してくれたので、聞いた時は非常に驚きましたね。

ティム： 性格の構造、いわゆる自己防衛のパターンは恐れと欲求の間で起きるというのが、中心的な考えですね。ある種、仏教的な発想に近いとも思いますが、執着が苦しみのもとであるような発想ですね。各タイプはどのような恐れと欲求を持っているのか、それを明らかにすることによって、性格の衝動を超えて、「ああまたやっているんだ」と少し深呼吸をして自分の本質に戻る、そんな自己観察がしやすくなりました。

—— ティムさんは長い間仏教を学んでいますが、仏教的な煩惱と悟りを意識のレベルとして把握できるところは面白いですね。

ティム： もちろん仏教だけではなく、キリスト教の罪や愛という発想とも重なると思いますし、文化を超えて、基本的に人間は同じ問題をもっているのだと思います。

—— 数年前、リソ&ハドソンのトレーニングコースでこの「意識のレベル」の話が出た時、私はケン・ウィルバー<sup>(注1)</sup>の『意識のスペクトル』を思い出しました。この本は人間の意識の発生、発達、そしてその後と、段階をきちんと整理して提示してくれたものですが、ティムさんはトランスパーソナルな分野で活躍されているので、エニアグラムをトランスパーソナルな中に位置づける意味ではリソさんの役割は非常に大きかったんじゃないでしょうか。

ティム： 私にとってリソさんのエニアグラムに出会ったことは、とてもよかったです。彼の教えでなかったら、



それほど興味をもっていなかったかもしれません。どうしてかというと、トランスパーソナル心理学にとっても近い部分があるからです。リソ&ハドソンの共著で最新刊、『The Wisdom of the Enneagram(エニアグラムの知恵)』に、ケン・ウィルバーとスタニスラフ・グロフ<sup>(注2)</sup>の二人が推薦の言葉を寄せています。実は僕が仲介役を務め、とくにグロフ氏に対してその原稿をお願いしました。ケン・ウィルバーもリソさんの研究を高く評価しています。

—— そう、この「エニアグラム研究」の3号が出る頃には、『エニアグラムの知恵』の翻訳版『エニアグラム——あなたを知る9つのタイプ』が角川書店から出版される運びですね。ティムさんと高岡よし子さんの翻訳で。私は前からとても楽しみにしていました。早く読みたいと思っています。

で、また話を戻しますと、ケン・ウィルバーはたしか『万物の歴史』(春秋社)の中でも、リソさんたちのエニアグラムを紹介していましたね。

**ティム:** そうです。ただ、ウィルバーの研究は意識の進化論のような部分があり、リソさんはどちらかというと人間の成長のプロセスについて扱っています。不思議なことに、9つの意識の層のようなものもウィルバーの理論の中にあります。そして層(レベル)を上がるには、「死と再生」の意識を伴うショック・ポイントを越えなければならないといっています。ただし、意識の広がりと共に上の層に上がる時には、それまで自分がいた層の煩惱を切り捨てるということではなくて、「含んで超える(含みながらもとらわれない)」ということですね。その発想もリソさんと非常に近いものがあります。自分のパーソナリティ(性格)を否定しないんですね。パーソナリティを理解することによって、本質へと向かう可能性が花のように開いていく、そんな自然なプロセスがあるわけです。そうしたプロセスが起きるためには、自分の性格構造の働きに対するアウェアネス(気づき)が必要です。アウェアネスと、「本質への渇き」というか「本質への選択」といったことでしょうか。

ですから、まず自分がどういうパターンに陥っているかに気づき、それをしっかりと味わうことで、自然な次の展開が開けてくることを信頼する必要があります。「何かしなきゃ」というのは、まさに自分のパーソナリティからくる衝動で、実はそうすることで、実際の体験から離れてしまいます。エニアグラムは、自然な次のステップが現れることを信頼するための助けとなる道具です。

—— ケン・ウィルバーの「超えて含む」、部分と全体、あるいはその全体とまたさらに大きな全体がホロン構造をなしている、ホラーキーと表現していますが、ああいう文脈のなかでエニアグラムの「意識のレベル」を扱ってみたいら面白いと思いますね。超えて含むことによって、進化するかどうか、気づいていくのだと思うし、否定し切り捨てていくものではないですから。

**ティム:** 人間であるかぎり、パーソナリティはずっと消えないと思います。ただパーソナリティに対しての執着が緩むことによって、より自由に自分のクリエイティブな部分が使えるようになる。

パーソナリティも、意味があって存在しています。ユング心理学から発展したプロセス指向心理学<sup>(注3)</sup>というものがあるのですが、起きることにすべて意味があると考えます。注 1) 必然性があるからこそ起きているのだ、と。方向性をもっているとも言えるでしょう。その方向性についてはウィルバーが表現しているし、リソさんたちのエニアグラムもある種方向性をもっていますね。

—— そうですね。むしろミンデルのプロセス指向心理学の方が、エニアグラムとの相性はいいというか、気づきという意味では強いものをもっていると思います。私も常々、この二つをあわせて使ったら非常に効果があるんじゃないかと考えています。ケン・ウィルバーはどちらかというと学問的でむずかしいですが、ワークということでは、エニアグラムはプロセス指向心理学とうまく融合すると感じます。

**ティム:** とくにプロセス指向心理学が扱う、声のトーンやボディーランゲージといったものへの観察のきめ

### 3 意識のレベルについて

細かさは、自分のパーソナリティの動きをつかんだり、その背後にある意味に気づくために、すばらしい組み合わせだと思います。私たちは10年以上前からプロセス指向心理学をやっていますから、エニアグラムのワークの中にはかなり取り入れています。

—— それは素晴らしいですね。エニアグラムだけ、という一つの考えに固まらずに、いろいろな方法を取り入れてみるのはいいことだと思います。

#### 〈3〉意識のレベルという地図

**ティム:** レベルの話ですが、リソさんたちが言っていることでまさにそうだと思うのは、健全、通常、不健全のどんな段階に自分がいても、本人の自意識からすると、「自分は通常の段階にいる」と思うのです。

—— そうでしょうね。自我が考える分には正当化しますからね。自我ではないところが判断できればいいんですけど、普通は自我がレベル判断をしてしまうことが多い。自我で判断するとレベルの問題は解決しませんね。

**ティム:** テロ事件を起こした人たちも、自分たちは異常だとは思っていません。自分たちが苦しめられたのだから、テロ行為は当然の行動であると思っています。

—— そうするとレベルを判断することは、個人にとって非常にむずかしい作業なわけですね。

**ティム:** そうです。発達の諸段階の9つのレベルのトップに自己解放のレベルがありますが、それはある種の悟りの境地かもしれません。でもそれを体験したら「はい私は悟りました」ということではないのです。人生の中で瞬間的にアクセスできるもの、つまり恐れから解放され、自然体でいられる1のレベルから、最下位の9のレベルである自己破壊のレベルまでのどこかで、恐れと欲求の間を行ったり来たりしながら人は生きています。

ちなみに1のレベルというのは、根元的恐れを乗り越えることにより、自分の心の欲求(根元的欲求)が自然と実現するレベルです。例えばタイプ7の場合、自分に十分な資源、栄養、幸せがないのではという、タイプ特有の「根元的恐れ」をもっています。それによって食欲という囚われに陥り、いつもハッピーでありたい、満足したいという、「根元的欲求」をもっています。しかし、自分が恐れから解放されたときには、外からの何かによって満足させられたり幸せになるのではなく、あるがままの今の状態をすばらしいものとして、ありがたく感じるすることができます。

それが1のレベルで、その瞬間はどんな人にも起こります。ガンジーやマザー・テレサといったすばらしい人物だけでなく、このあいだのテロ事件でも、いわゆるホームレスから会社経営者まで、いろいろな人が瞬間的に自分の恐れを超えたやさしさを示し、英雄的行動をしましたね。自分の恐れを超えていくときには、ふだん自分がいるレベルが高くて、低くても、関係ないと思います。

したがって、健全なレベルに行かなければならないというのではなく、いま自分がどこにいるか、実際の行動はどういうものか、解放的か防衛的か、それらに気づくことが大切です。自分の枠を超えることを意識的に選択していくことが成長なのです。

パーソナリティや自己防衛は無意識に自動的に働くものですが、本質は目覚めのプロセスですから、意識的に選択していく。その選択は誰でもできるのです。自分がいまどこにいるのか、レベルを見ていくことは、自分のパターンを掴みやすくします。リソさんのあれほど具体的な地図はなかなかないと思います。

そして意識的選択とは、お寺に入らなければならないとか、教会に入って祈らなければならない

ということではなく、自分の恐れに気づけるチャンスと呼び起こすこと。吉福伸逸さんの表現を借りると、日常生活の中でのひとつの「ひっかかり」を目覚めの「とっかかり」とすることです。

—— プロセス指向心理学でも同じような意味で、エッジ(心理的障壁)が重要であるということを書いてますね。ここに留まってしまうと病気になったりする。

**ティム:** 自分が緊張したり不安になっているのは、気づきの瞬間であり、自分のパーソナリティの境界線にきているのだという目覚めの信号です。そのとき防衛に走るか、あるいはこの機会を使って自分自身の心や他者とつながることができるか。小さな選択の中で、少しずつリラックスし、自然体でいられるようになってくることが、成長だと思えます。

人生は非常に優しいものです。ずっと待っていてくれます。目覚めのコールは自分のひっかかりからきますので、今回はパスしても、またやってきます。そこでパスすると、また苦しくなります。パスすると苦しくなるなら、いつそ目覚めのプランにのってみようかと(笑)。もちろん大変なことです。それによって自分の可能性がだんだん広がっていく。人生で苦しんだことは無意味なことではなく、大輪の花を咲かせるための心の肥料となるのです。

#### 〈4〉 諸レベルの可能性

—— リソさんの「意識のレベル」は直線モデルですね。当初私はリソさんから説明を受けたときに面白い考え方ではあるけれど、これはケン・ウィルバーもそうですけれど、私個人としては直線モデルよりも、レベル5を中心とした曲線モデルの方がわかりやすいと思いました。そんなときにちょうどリリーの『意識の中心』<sup>(注4)</sup>を読んで、その中にイチャーツの「意識の諸レベル」について紹介されているのを知りました。Vの字というか、いわゆる1から9までのまん中(底)に5があるわけですね。その5を中心にして自己崩壊が始まる過程と、統合が始まる過程がある。それがVの字になっているわけで、健全な方向に行くにしても、不健全な要素もある程度理解するというのでしょうか。この本では、光と影、存在と非存在という形での対になった考え方をしているわけです。私はむしろイチャーツのVモデルが非常に実感できる。健全、通常、不健全という3つの分け方と同時に私は5を中心として2つに分けるVモデルもあっていいと思っています。

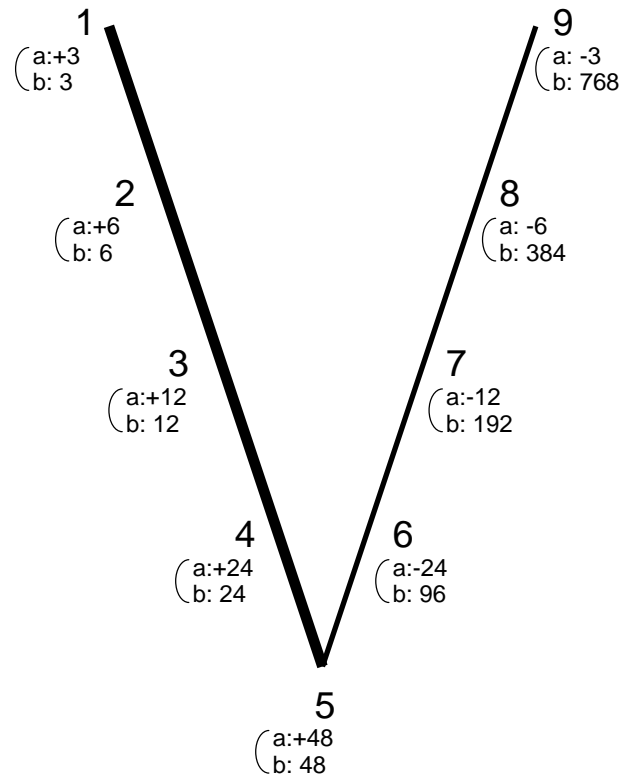
この意識のレベルに関しては、まだいくつかの可能性を抱えているのかなと。1, 2, 3の健全、4, 5, 6の通常、7, 8, 9の不健全がそれぞれに独立した構造をもっているともいえるわけですね。間にショックポイントがあって。1, 4, 7あるいは2, 5, 8にも共通性が感じられる。またレベル5に注目していると、折り返し地点としての意味ももってくる。レベルの問題はまだ発展過程にある。この、諸レベルの可能性は、固まった理論というのではなくて、リソの中ではまだホットなテーマなのではないでしょうか。(図1参照)

**ティム:** その通りだと思います。僕がリソさんたちを好きな理由のひとつは、理論として進化し続けているということです。私もリリーの発想は大好きですが、意識のポテンシャルを表現していると思いますね。こうも言えると思うんです。リソのレベル1の解放のレベルと最下位のレベル9は意識の質として、あるいは意識のエネルギーとして同じくらいのエネルギーの強さ、広さをもっていると思います。それを体験するとき、あるがままで体験するか、あるいは恐れて抵抗するか、ということだと思います。例えば、山の頂上にいるとしますね。恐れがなければ非常に感動的な畏敬の気持ちになります。子供の頃、高いところから落ちたことがあり、それに対する防衛があつたりすれば、頂上にいることは非常に苦しい体験になります。

### 3 意識のレベルについて

(図1)  
意識の諸レベル

\* リリー著『意識の中心』「チリへの二度目の旅:定義された意識の諸状態」の図を参考にV字化してみた。(木ノ内)



※ aは意識の状態、  
bはグルジェフの  
振動レベル。  
※ 1～5の肯定的  
空間は実在する  
が、5～9の否定  
的空間は、いかな  
る実在の場所もも  
たない。5～9は  
1～5の肯定的空  
間に対応する領域  
に位置するものと  
想像される、との  
コメントがある。

—— 私事ですが、溺れた経験のある人はプールが嫌いということですね(笑)。

**ティム:** そういうことですね。しかし、その体験をサポートしてくれた人たち、とくに親ないし親に代わる養育者からのサポートですが、そういったものがあれば、逆にすばらしい水泳選手とかダイバーになれたりします。深い体験によって人間は成長していけるんです。サポートを得られず、成長に結びつかないで、自己防衛に留まる場合もあります。

天才といわれる人もそうですけれど、天才と狂気のどこで線を引くかということも同じ問題だと思います。ヒーラーやアーティストなどすばらしい才能をもった人たちが、その同じエネルギーで、狂気に向かうことも可能なように。

## 〈5〉 苦しみの体験を通しての成長

—— 成長と分裂といったように一見相対するものが、対立せずに接近しており、その中には同じものが含まれているということですね。例えば分裂の経験がないと統合の方へ進めないといったように、二つが対立していないんですね。意識のポテンシャルをどうやって生かしながら成長していくかという、やはりケン・ウィルバーのいうホラーキーな世界、超えるために含む、含みながら拡大し、成長していくことになるのでしょうか。

**ティム:** 成長というものは、先ほどの含んで超えるということもそうですけれど、まさにアメリカがいま体験しているような悲しい状態、大切なものが失われたという悲しみを通して起こると思います。つながりや本質的欲求が強くなるのです。人はたくさん苦しみの体験によって、人格ができあがっています。それはほとんど無意識にやっています。意識的に成長しようとするとき、光を目指すときには、影の部分が明らかになってきます。興味深いことですが、意識が広がることによって、より深い執着が同時に見えてくる。

グロフの発想である「スピリチュアル・エマージェンシー」という考えもそうですけれど、精神的危機状態の中には可能性も秘められています。「エマージェンシー」は「危・機」で、何かが「出現する」という意味もあります。人間は無意識で苦しんでいることがいっぱいあるわけですから、成長するためにはそういう部分も見なければなりません。意識の広がりによって、大変なものも見えてきます。

また苦しみというものはマイナスの方向ですが、マイナスがなければプラスは存在しません。自分の苦しみを癒さなければ、超えられません。統合しなければ次のレベルへは行けないのです。

## 〈6〉 3つのセンターとレベルの関連性

—— そうですね。全体性や統合というものが少し分かった感じがします。それにしても、たとえば苦しみや恐れから統合を求めるといったことがあり、あるいは意識が広がってこそ底が見える、ということもあるわけですね。統合と分裂の不可分な関係というものが見える気がします。

ところで、レベルとセンターの関連にも興味があります。たとえば健全なレベルであれば自分のタイプが位置するセンターだけをうまくつかって生きていけますが、通常になると近くのセンターの機能を巻き込んで生きざるをえない。さらに不健全になると3つのセンターを精一杯背負い込んで、駆使しながらやっと生きている。意識が広がって全体が見えると、センターの使い分けもうまくできるわけですが、レベルが下がるとセンターの機能をいくつもフルに使わない限り生きていけない。このへんのメカニズムについてもリソさんはお話されていましたね。

### 3 意識のレベルについて

**ティム:** センターの不均衡についての話は、“Understanding the Enneagram”の改訂版の中に書いてあります。人間は本能センター、フィーリング・センター、そして思考センターという3つのエネルギー・センターをもっていますが、その内のひとつにおいて自分のパーソナリティがもっとも強く形成されています。健全な段階にいと、こうしたパーソナリティによる歪みが発生しているのは、自分のタイプが属しているセンターだけですが、通常の段階であればもうひとつのセンター、さらに不健全な段階では、すべてのセンターがバランスを崩し、巻き込まれていきます。

—— 逆に考えるとセンターに執着しているところを放していく、それも遠くから放していく。自分がタイプ7だとしたら、本能に近くて、遠くにハート(フィーリング)センターがあるわけですから、まずハートセンターの問題。感情的に解放していく。そのようなワークをすれば、むしろ逆に成長の方向に行けるのではないのでしょうか。囚われの方向で言えるのなら、解放の方向でも言えるのではないかと思うのですが。

**ティム:** そうですね。例えば思考タイプの場合は(タイプ 6 の場合はプライマリー・タイプ<sup>(注5)</sup>なので、少し複雑ですが)、自分の気持ちそのものにもっと触れる必要があります。思考タイプとしては物事を分析したり、計画したりというのは、日常茶飯事なことですから、自分の感情や身体に目を向けてみる。そのことにより、頭が静まったところで思考が生まれてきます。

—— そういう意味では意識のレベルは、生きやすくしたり、あるいは生きにくくしているメカニズムを教えてくれるものですね。その地図を使えば、エニアグラムを一層有効に使えるということが出来ますね。

**ティム:** またエニアグラムを使うためには、知識だけでなく、日常の中で心の余裕を育てるような方法や気づきのための実践が必要だと思います。それは座禅かもしれないし、プロセス指向心理学かもしれませんが、自分に合ったものが重要です。その際にどういう手段がいいのかを知るためにも、エニアグラムは非常に助けになります。例えば思考センターの人は、頭を鎮めるためのヴィパッサナ<sup>(注6)</sup>や座禅などが役に立ちます。センターごとにいろんな手段があると思います。エニアグラムはとてもニュートラルなシステムですから、さまざまな方法論や個人々の多様な背景に合わせる事ができます。エニアグラムのいいところは、特定の方向に導くというのではなく、よかったらひとつの地図としてお使いください、というところですね。

—— トランスパーソナルの中にエニアグラムを位置づけないとこういった可能性の広がった話しはできないですね。

**ティム:** エニアグラムはいろんな目的に使えますし、ビジネスの世界でも使えます。もっと深く知りたい人にはこういう自己探究の道がありますよということです。

—— 今日は貴重なお話を聞かせていただいて、どうもありがとうございました。

(2001年9月18日)

インタビュー: 木ノ内博道

- (注1) ケン・ウィルバー:トランスパーソナル心理学の代表的理論家の一人。著書に『意識のスペクトル I・II』『アートマン・プロジェクト』---いずれも春秋社---など多数。
- (注2) スタニスラフ・グロフ:トランスパーソナル心理学創始者の一人で国際トランスパーソナル学会創立者。著書に『脳を超えて』『魂の危機を超えて』---いずれも春秋社---など多数。
- (注3) プロセス指向心理学:ユング心理学から派生し、現代物理学や老荘思想、シャーマニズムなどとの接点を強くもつ、総合的な心理学である。心理療法としても、ドリーム・ワークやボディワーク、家族療法、グループ・プロセス(コミュニティや社会の葛藤解決も含め)など、幅が広い。心理療法の最前線として、関心を集めている。トランスパーソナル心理学のカテゴリーにも入っている。
- (注4) 『意識の中心』邦訳 P214~215(第5版) 平河出版社 参照。“THE CENTER OF THE CYCLONE” John C. Lilly 1972
- (注5) プライマリー・タイプとは、エニアグラム図形の正三角形上にある、タイプ3、6、9の3つのタイプのこと。
- (注6) 上座部仏教の瞑想法だが、その普遍的有効性が注目され、一般に広く使われている。

## 4

## 2つのインタビューを終えて

中嶋真澄

エニアグラムはどこから来たのか？ そして、エニアグラムはわたしたちをどこへ導くのか？ エニアグラムのルーツをめぐる問いは、必然的にエニアグラムの目的についての問いとも関連してくる。

ごく最近まで、9つの性格タイプはイスラム教の神秘主義者スーフィの間で、門外不出の口伝として伝えられてきたものだという説が一般に流布していた。現在では、パーソナリティ・システムとしてのエニアグラム(エニアグラム・タイポロジー)に限って言えば、アメリカのエニアグラム研究者たちはスーフィ起源説を撤回し、チリのオスカー・イチャーツを創始者とするというところに落ち着いている。

しかし、それだけではエニアグラムがどこから来たのかという問いに対して、納得の行く答えはまだ得られていない。そこで、こんどはエニアグラムの目的について目を向けると、エニアグラムとは単に性格を9つのタイプに分類するものではないと言われていることを知る。タイプ分けはほんの入り口に過ぎないと。

では、その入り口はいったいどこにつながっているのか？ わたしたちは何のためにエニアグラムを学ぶのか？ スピリチュアルな自己成長のためである、と言われている。では、スピリチュアルな成長とはどういうことか？

こうして、問いは問いを生んでいく。しかも、その間に以前の問いは完全にクリアになったかと言えばそうではない。たとえば、スーフィ起源説一つとっても、ではなぜごく最近まで、エニアグラムはスーフィに門外不出の口伝として伝わってきたと言われてきたのか？ なぜ？ という問いが残る。そもそも、イスラムの神秘派スーフィとはどういう人々なのか？

一度疑問を持ったら、さまざまな文献をあたってみなければならなくなってくる。そうすると、ようやくスーフィはギリシアの神学や哲学の影響を受けていたらしいということが分かってきて、さらに初期キリスト教との関連も見えてくる。また、仏教との関連も何かありそうだとすることも分かってくる。そして、エニアグラムは人間性に関する古代の知恵の集大成の上に成り立っているということの意味が理解できるようになる。

とは言っても、その理解は単に言葉を並べているだけの、まだまだ表層的なものに過ぎない。エニアグラム・ファンリテーターの中に、このことについてよく理解している人はどれだけいるのか？

一方、エニアグラム・タイポロジーがアメリカで急速に広がっていった1970年代あたりに目を移せば、オスカー・イチャーツとその他のエニアグラム著者たちの間に起きた著作権問題に突き当たる。これはまったく、エニアグラムを学ぼうという気分を、そして学んだことを人に伝えたいという真摯な気持を、萎えさせるものだ。

そこで、イチャーツと彼が訴えたカトリックグループの著者たち、そしてヘレン・パーマーとの間に、いったい何があったのか、詳しく知りたいと思った。また、じっさいにイチャーツのエニアグラムを、カトリックグループの人々やヘレン・パーマーに伝えたクラウディオ・ナランホという人物にも興味がわく。

結局のところ、スーフィ起源説にしても、エニアグラム著者たちの著作権問題にしても、そのことに明確な説明がなければ、何か全体があいまいにされた感じで、エニアグラムというのはどこか胡散臭いなあという印象だけが残ってしまう。これがいまだにエニアグラムが星占いのような性格占いと見なされる以上に、怪しい新興宗教のようなものと敬遠している人々がいることの原因でもあるように思われる。

それから、日本にエニアグラムが紹介され、エニアグラムのワークショップなどが開催されるようになったのはどういった経緯によるのか？ そのあたりのことも一度整理しておきたいと思った。いずれにせよ、エニアグラムの学びはグループでの気づきのワークが主体となる。そこで、ともに学ぶ仲間を必要とするわけだが、ではどういう場でどういった人々とともに学べばいいのか？ ここからはエニアグラムの目的と関わる問いとなってくるし、これからのわたしたちの活動とも関係している問題だ……。



わたしは以上のようなつぶやきにも似た問いをここ2、3年ずっと心の中に抱きつづけてきた。そして、このたびようやく、これらの問いを問いとして投げかけることのできる幸運な出会いに恵まれた。理辺良先生、吉福氏とお話を伺った時期は、この『エニアグラム研究』3号に掲載されている順番と日付は逆になるが、半ば突撃インタビューのような形でお二方にお話を伺った。その間のわたし自身の気づきはとても大きかったし、その気づきを読者とともに分かち合いたい。

お二人のお話はまず第一に、タイプがどうのこうのという前に、ある個人の人柄や人間性といったものに目を向ける、わたしたち自身のコモンセンス、すなわち良識といったものをもっと信じていいんだよということを教えてくれているように思う。さらに、エニアグラムを学ぶわたしたちにたくさんの勇気を与えてくれる。

もとより、インタビュアーのこのような文章は蛇足であったかもしれないが、問いを問いとして受け止めてくれる人はじっさいそう多くはないのである。

インタビューを終え、インタビュアーのつたない質問に答えてくださった、お二人の言葉を原稿にまとめながら、わたしはシラ書の一節にあるこんなフレーズを思い浮かべていた。

洞察に富んだ人に出会ったら、  
朝早くからその人のもとへ行き、  
戸口の敷石がすり減るほど、足しげく通え。(シラ書:第6章 36節)

## ブックレビュー

### エニアグラム ――あなたを知る9つのタイプ[基礎編]

ドン・リチャード・リソ&ラス・ハドソン 著  
高岡よし子+ティム・マククリーン=訳

[基礎編]とあるが、本書は原書の”The Wisdom of the Enneagram”の分量が日本語版にするとかなりの分量になるため、著者であるリソ&ハドソンの許可を得た上で、全体が再構成され二分冊とされたという、その一冊目である。従って、この後に[応用編]が出版されることになるだろう。

この[基礎編]ではまずタイプ判定のための質問表があり、次にエニアグラムのルーツについて述べられ、さらに本質と性格についての考え方が、9つのパッションと各タイプの根源的恐れと根源的欲求についての説明とともに示される。それから、本能・フィーリング(感情)・思考の三つの機能、自己主張・追従・遊離といったホーナイの三つ組み、ウイングのサブタイプについての記述が続き、さらに各タイプの成長のレベルの概念が紹介される。

リソたちはこの成長のレベルについて、健全、通常、不健全をさらにそれぞれ三つの段階に分け、9つの段階に区分している。各タイプの健全な段階から、より固着化した通常の段階に移りつつあるという指標となる<目覚めの注意信号>、各タイプが自我を補強するために、他者を傷つける独自の方法をもっていることを指摘し、「自分がしてほしいことを人にもせよ」という黄金律とは反対に、「自分がしてほしいと恐れていることを人にしてしまう」メカニズムを示す<鉛の法則>など、各タイプへの理解と気づきを深めていく上で、示唆に富む内容が語られている。

『エニアグラム研究』3号のティム・マククリーン氏への木ノ内さんのインタビューは、この成長のレベルをめぐっての話が中心になっている。

原書では前半で説明されているリソたちが発見したハーモニック・グループの特徴と、タイプごとの記述のなかでウイングのサブタイプに続いて描かれている自己保存・性的・社会的といった本能のサブタイプについては、この[基礎編]には入れられていないので、後の[応用編]の出版を待たなければならない。

さて、本書のたいへんありがたい点は、よくこなれた分かりやすい日本語と、読者の理解をうながしてくれる訳注にある。訳注の作成がいかに大変な作業であるかということは想像に難くない。

本書が出版されたおかげで、エニアグラムについての共通認識が深まっていくことと思われる。この本をテキストにして、勉強会やワークを進めていくのもよいだろう。

最後になったが、本書の最初の方で、これまで原書をあたってきて、半ば読み飛ばしていたところも、改めてすぐれた日本語訳に触れるといまさらながらに、気づかされることがあった。つまり、タイプ自体は、人の特定の経歴や知性、才能、誠実さ、人格など多くの要素について語るものではなく、わたしたちの世界観、選択、価値観、動機、人への反応のしかた、ストレスへの対応方法などについて語るものだという。この認識は重要である。

(中嶋)

## 編集後記

『エニアグラム研究』第3号をお届けします。今回は3人の方にインタビューを行いました。快く応じていただいた吉福氏、理辺良先生、ティム氏に感謝します。またインタビュアーとして中嶋真澄さん、編集面では飯村啓子さんに大変お世話になりました。

中嶋さんが「インタビューを終えて」で書かれていますので、多くは書きませんが、私はインタビューという形での研究に非常に興味をもっています。話を聞くだけでは研究にならないではないか、という読者もおられるでしょうが、論文をしたためるよりもより大きな知的興奮に出会っています。

15世紀の印刷技術の開発とともに、知的作業は個人的なものになりました。不特定多数に向かって黙々と原稿を書き、本を出版するのが一般的になり、著作に対しては著作権が付与されるようになりました。書かれたものはいかにも真理であるようなイメージが加わりもしました。最近のインターネット社会では、コラボレーションがふつうのこととなり知的活動のあり方もだいぶ変わってきています。

インタビュアーの質問そのものが知的状況を反映することになりますし、それに対するご意見、さらに質問と続く編物のような表現製品は、素材の感触、あやなす風合いなど、人柄がにじみます。もちろん、インタビュアーも含めて二人の人柄が、です。 (木ノ内)

編集発行: エニアグラムアソシエイツ

Enneagram Associates 2001.11.20

All rights reserved